脱獄海峡

稀代の脱獄魔、白鳥由栄伝の白眉作。
あらゆる秘術を尽くした脱獄の超人と
してこの男の名は、今も生き続ける

目次

第一章　網走無情
第二章　六回目の脱獄行
第三章　錠前破り
第四章　ねぶた囃子の夜
第五章　流氷群塊
第六章　脱穀執鬼行
第七章　情愛恋慕
第八章　破獄語り

第一章網走無情

1

北限の地の空は、まだ押し黙ったような灰色であった。遅い春の訪れのために、網走の海岸線の流氷群が去ったのが十日ほど前のことであった。

あの巨大な 氷塊の山が、強い南風（だしかぜ）につき動かされて、十数時間のうちに崩れ落ち、地を叩き壊すような轟（とどろ）きの音を残して去った。

珍らしくオジロワシが一羽、灰色の空を舞った。春の訪れを告げている。空が、オジロワシの鋭い飛行につれて真二つに引き裂かれて行く。

その軌跡の先に、大地にどっかと足を据えた網走刑務所があった。

昭和十八年四月二十三日のことである。白岩由吉（しらいわよしきち）、三十八歳がこの日、網走刑務所に移送されてきた。

無期懲役囚だったが、さらに逃走加重の罪が三年ついていた。前回、秋田刑務所を脱獄したための加算刑である。

すでに、このときで脱獄歴六回、今回は東京・小管（こすげ）刑務所からの移送であったが、護送の刑務官が七名もついた。通常は二名である。

このものものしさは、受入れ側の網走刑務所も同じことで、所長の川合喜市以下、緊張の面持ちで札付きの脱獄囚を迎えた。

ずんぐりとした体躯で、小柄、どこと言って目立つ体つきではない。

ただ、顎の張ったいかつい感じと、鋭い眼光だけが、この男の不屈の反抗心を表にあらわしていた。

所定の手続きののち、白岩は、扇状に並んだ五舎房の一つに引き立てられた。独居房は第四舎房になる。すりへった煉瓦の敷き詰められた道はでこぼこしていた。

明治以来の建造物である。煉瓦の一つ一つはここに収容された者たちの恨みの足跡をそこに残しているように思われた。

中央見張所の看守たちも、眼の前に現われた小男が白岩由吉と知ってみんな身を固くした。まだ前手錠は嵌められたままだった。

このことも異例である。この舎房内に入れば手錠は外されるのが規則だった。

この小男が抗議の声を出す。

「おい、もう外せじや、おい」

そばに付いていたのは一メートル八十センチ近い巨漢の小塚看守であった。名前とは似ても似つかない。柔道三段、剣道二段の猛者（もさ）であった。

小塚看守は彼の要求を無視した。

そのとき、白岩はかすかに口元に笑いを浮かべた。不敵な面構えになった。
いきなり、小塚看守の靴先を踏み付けた。ゴム草履に素足だったが、思わず小塚看守は「うっ」と声を出しそうになった。いわゆる馬鹿力であった。
挑発にのせられないよう小塚看守は一度は我慢した。
第四舎、二十四号舎房の前に来た。
（四の二十四か、縁起でもねえ番号だ、おらを死人扱いしてるだな
白岩は無性に腹が立った。前回、逃亡した秋田刑務所の看守たちも彼を人間扱いにしなかった。（こいつらみんな人間の顔の皮をかぶった鬼共だ）また、彼の反抗心が頭をもたげた。眼を据えるようにした。
二十四号舎房の扉が開錠された。
もう一人の看守、小柄の野沢が扉を開けた。とたんに、後からどーんと背を押された。
気配を感じて白岩は一瞬身構えたのだが、小塚看守の力のほうが勝っていた。
舎房の畳の上に叩きつけられるのは免れたが、手錠のままだから白岩は不様な恰好で這いつくばった。
「おい！なめんでねえ、ここをどこだと思ってるんだ。地獄の網走刑務所だということをよーく教えてやる」
すぐさま立上り、飛び掛かってくるものと思って小塚看守は身構えた。が、案に相違して、白岩はゆっくりと体をもち上げた。小塚看守のほうに向き直った。

「たまげだ歓迎だな、これだばなんもできねな」
白岩は薄ら笑いを浮かべ、手錠の手をつき出した。
「正座しろ！」
小塚看守が恫喝（どうかつ）の声をあげた。川合所長からは“少しヤキを入れてやれ”と直命を受けていた。
白岩は一見従順になった。あきらめの表情を見せた。眼の前には雲をつくような大男が立っているのであった。勝目はなかった。
が、次の瞬間、白岩は、横っ飛びに身を翻し、自由な二本の足で、小塚看守の股間に蹴りを入れた。
危うく小塚看守は身を避けた。
「貴様あっ！」
舎房中に聞えるような蛮声を小塚看守が発した。畳の上に引っくり返っている白岩の首根っこをつかみ、立たせると、小塚看守はそのまま、ぐいぐいと白岩を舎房の壁に押し立てた。
畳三枚分の独房内である。あまりの勢いに白岩は後頭部を窓際の鉄格子にぶつけた。
続いて、小塚看守の握り締めた拳が、みぞおちの下あたりを直撃した。
「うーむ」
と呻き、そのまま、白岩は膝を折るようにして前に、ぱったりと倒れた。
モロに一発入っていた。
「おい、大丈夫か」
野沢看守が、驚ろき、白岩の顔をのぞき込

む。白岩の顔から血の気が引いていた。瞼がぴくぴくと痙攣（けいれん）していた。
「まさか？」
「やりすぎたかな。薬がききすぎたか」
小塚看守が今度は顔色を変えた。絶命寸前の小動物のように見えた。
白岩は腹のあたりをくの字に折り、もう、息も絶え絶えといった状態だった。嫌な思いが小塚看守の頭の中を横切った。
みぞおちにモロに入ると胃袋だって破裂することがある。まして彼は自分の力に自信があった。この男が死ねば…恐ろしい思いが頭の中を掠めた。
「これは医務室行きだ」
そう野沢看守が、舎房の外に張り付いていた同僚の看守たちに言った。と、そのとき、むっくりと、白岩が起き上った。
「おら不死身だでな、こした死人部屋さ入れだはって死なねぞ」
小塚看守は安堵（あんど）の表情を浮かべたが、同時に、この男の肉体の強靭（きょうじん）さに舌を巻いた。
まだ白岩の顔は蒼かったが、怒りのために額に青筋が立っていた。短気な性格である。
「おらは若え時、タコ部屋のキソク人だったでな。ちゃんとやる性格だア。この中（ながさ）入れば、手錠はちゃんと外すもんだばな。おめら、規則破る気だか」
きちんと正座し、二人の看守に面と向った。
タコ部屋のキソク人とは、契約書をきちんと事業主との間に交わして、マジメに勤め上

げる土工人夫のことをいう。
「なにい！ここはタコ部屋じゃねえ。おまえ、ここが刑務所だってことを忘れたのか！」
「いいはで、所長ごと、こごさ呼べ！」
「なんだあ！対等の口ききやがって。おめえのようなもんに、所長が直き直きお出でになると思うのか。すぐに鎮静房に行けるように手続きしてやろうか」
「よし、わがった。おめえらが規則破るなら、おらはこの手錠、ぶち壊すはでな！」
「馬鹿野郎が！やれるものならやってみろ」
白岩は針金一本あれば、かんたんに手錠の鍵を開けてしまう。白岩のこれまでの脱獄歴のことを聞き知っている二人の担当看守はこの小男が豪語したことが大ボラではないことはわかっていたが、この場に針金一本あるではなかった。手錠が外せるわけはなかった。
また、不敵な笑いが白岩の口の端に浮いた。双つの眼が、次にはかっと見開かれ、光に充ちた。
二点を凝視する。
両腕の脇を閉め、肘（ひじ）を固めた。手錠を腹の前に突き出した。張った下顎がぴくりと動く。ぐっと歯を噛みしめた。
「うつ！」
白岩の両拳に力が漲（みなぎ）った。太い丸太ン棒のような腕が硬直した。同時に外側にと両の拳が力一杯に振り切られていた。
正座していた両膝が割れる。顔面に朱が注いだ。
「カチッ」

と金属のこすれる音がした。それほど高い音ではない。むしろ鈍い音だった。
わずか数秒で、両手首に喰い込んでいた手錠の鉄 輪の部分が外れた。鍵はちゃんと掛かっているのに、噛み合わせのぎざぎざ部分の鉄が伸びて、円形の鉄 輪が歪んだ半円形になっていた。飴ん棒のように捻 じ曲げられていたのであった。
もちろん、白岩の両手は自由になっていた。わざとらしく自由になった手をぶらぶらさせてみせた。信じられないことが起きていた。未だかつて、刑務所の長い歴史の中で手錠を引き千切った者はいないのだった。
いかに膏力（りょりょく）の強い者でも手錠を掛けられたままの状態で、鉄輪をひん曲げることなど到底不可能であった。
が、目の前には、拘束の用をなさなくなった破壊された手錠が投げ捨てられていた。
二人の看守はただ息をのみ、立ちつくした。まばたき一つしなかった。
「こしたもの、おらさだば、はア、おもちゃみてなもんだ」
ふふふと今度は声を出して笑った。
「規則はまもらねばなっ、刑務所だらなおさらまもらねば駄目（まい）ねえもんだ」
もう、小塚看守は蛮声を張り上げなかった。なにか空恐ろしいものを見たような気がした。噂には聞いた脱獄囚ではあったが、いま見たものは人間技とは思えなかった。
一歩、二歩と小塚看守は退いた。もう、野沢看守も扉に張りついていた。

小塚看守は怯（ひる）んだ様子を見せまいとして、正座している白岩を精一杯睨み返した。
その前に、射るような白岩の視線が小塚看守の両眼を刺し貫いていた。
殺気だった。獣と対峙（たいじ）している思いになり、小塚看守は思わず知らず、後退（あとじさ）っていたのであった。視線も外らす。気がついたら二人の看守は舎房の外に出ていた。慌てて扉を閉め、施錠した。
ほっと一息ついた。
扉一枚距てたことで、二人は安全な場所に足をおいていたのであった。
「保安課長にすぐ知らさねば」
野沢看守が言った。そのときであった。
眼の前の、鉄格子窓に白岩のいかつい顔が張り付いた。
「どんどんどん！」
と木の扉を足で蹴り上げた。
四舎房だけではなく、中央見張所から左右に伸びた他の舎房にまでこの音は響いた。
「おい、止めろ！貴様あ！」
また小塚看守が、鉄格子窓に寄り制止しようとした。その顔に、白岩は鉄格子窓の隙間から、ぺっと唾を吐きかけた
「おらは今日、こごさ送られできた白岩由吉つうもんだ。手錠はめだままにしやがったはで、たった今、手錠ごと引き千切ってやった。こんな古臭え、がたがたのムショだの目でねえ。白岩由吉はな、絶対にこごからも逃げはで、見でろ！この前、秋田刑務所の鎮静房がら逃げで六回目だア。おらはどごのムショだって逃げながったとごろはねっ。やると言っだら絶対やるでなっ」

彼は不敵にも脱獄宣言をやってのけた。
舎房内の同囚たちから、支援のことばが返って来ると思ったのに、なんの反響もなかった。すでにそのとき、中央見張所にいた看守たちが、四舎房の前の長い通路に散っていた。同調した者はみんな規則違反で挙げるつもりであった。それで、独房の連中は黙らざるを得なかったのだ。
小塚看守もやっと力を得た。なにしろ、ここでは、地獄の鬼塚と言われている。力もあることからもっぱら硬面（こわおもて）の役を引受けていた。ヤキを入れるときは、いつも、この男が先頭に立って来た。
「お前たちを地獄に送るぐらいかんたんなことだぞ」というのがこの男の脅しの常套句（じょうとうく）であった。
それで、地獄の一丁目の入口には鬼塚が立っているという話がいつの間にか、ここでは出来上っていたのであったが、、さすがの鬼塚も、白岩には一敗地にまみれたことになる。第四舎房は通称“地獄房”と呼ばれていた。
その地獄の番人と白岩は一戦を交じえたのであった。二十四号舎房で、なにが起きたのか、その日の昼食時には、食事を差し入れる雑役囚の口から、鬼塚と白岩の対決の話は舎房内に知れ渡った。脱獄囚、白岩由吉の名が知れた。とてつもない、力を内に貯えた脱獄常習犯の男に、刑務所側はすぐに対応策を考えた。
その日の午後には、小塚看守を先頭に、屈強の看守たちばかりが選ばれて、二十四号舎房に押し入った。

みんなで力ずくで押さえつけ、再び、前手錠を掛けた。壊された手錠はたまたま使用年数の古いものだったので、どこかに故障か、摩耗があったものと保安課長は判断した。

それで新品の手錠を用意したのだった。

小気味のいい音を立てて、手錠の鉄輪のぎざぎざ目部分が、共腹部分に嵌り込んだ。

なにしろ刑務所開設史上、手首の力だけで手錠を 破壊した者は一人もいないのだ。掛かりの具合いもいい新品の手錠が、同じ術で壊せるはずはなかった。

川合所長も、そう信じた一人だった。むしろ、この破壊事件に教えられ、使用中の手錠の再点検を指示した位だから、壊された手錠は最初からどこかに欠陥があったのだと強く信じたほうだった。

が、有り得ないことがまた起きることになる。彼らは、白岩由吉という男が、とてつもない力を持った超人であることをまた思い知らされることになるのであった。

2

夕食は前手錠を嵌めたまま、白岩は、這いつくばるようにして食べた。足で汁碗（じゅうわん）を引き寄せ、犬さながらの恰好で味噌汁を吸った。東京・小菅刑務所から移送された長旅の疲れのために、さすがの白岩もこの夜は就寝の声がかかった九時にはもう深い眠りに入っていた。なにしろ三時間がかりの移送だった。

あまり夢を見なかった。ただ明方に深い闇

の底に突き落される夢を見た。暗いトンネルの中を歩いていたらとつぜん、川底掘下げの土木現場の深みにはまっていた。タコ部屋にいた頃の怖ろしい体験がまた夢の中で再現されていたのであった。

網走刑務所での第一夜が明けようとしていた。獄舎の外では風が鳴り、海の騒ぐ音が聞えた。とうとう、北の地の涯まで来てしまったという思いがあった。

この網走の地には自分で希望して来た。拘禁区令では小菅刑務所・東京になるが、重罪犯は戦時中で首都空襲のおそれもあり、安全な地方の刑務所に分散留置された。

昭和十六年十二月八日の開戦以来、一年半近くが経過していた。戦局不利な状況が作られつつあった頃のことだから、ぶっそうな脱獄常習犯を小菅刑務所においておくこと自体に問題があった。

網走刑務所に収監しておけば、もはや、逃走も不可能と、法務局は判断していたのであった。

白岩は自分で希望して網走に来た。

すでに、青森、秋田、札幌などの北の地の刑務所では厄介者扱いされてきた。「網走は食いものの待遇がいい」と小菅刑務所の囚人仲間に教えられてその気になった。法務局も、日本で一番規律が厳しく、また逃走を企てた としても要塞堅固（ようさいけんご）な地であること、それに網走刑務所からは塀を越えて脱獄した者はいないことから、本人の希望を入れた。

網走刑務所は明治二十三年に網走外役所と

して設置され、三度の火事に遇ったのち、明治四十五年に五射状獄舎が復旧完成した。（＊旧建物は博物館に一部移管、現在は新獄舎が完成）

「魚の腐ったような匂いだ」

翌朝、目覚めた白岩は独りごとを言った。木造の獄舎には囚人達の異臭が染みていた。

白岩の眼の先に、木格子（きごうし）が見えた。ここの木格子は独特のもので、槐材（えんじゅざい）が菱型に等間隔の隙間をとってきちんと並べられていた。

木製扉の片側にこの木格子はあった。

舎房内からは見えないが、外の通路に立ち、木格子の隙間に対向すると、中の様子が見える仕掛けになっている。

この構造は冬期極寒の地なので、通路の中廊下でストーブを焚き、暖気を送るための用もなした。

そのとき、白岩の頭のなかに巡っていたのは、習性になった脱獄への思いであった。

狭い場所に拘禁されると、もう本能的に、この舎房の弱点がどこにあるかを探り始めるのであった。

眼の上の高い位置には、鉄格子の嵌った高窓があった。外の通路に面している。

木製扉の上の位置である。その木製扉には、内部を巡察するための横長の素 通しの小窓がある。四本の鉄格子が嵌められていた。寝具にも饐（す）えた体臭が染みついている。糞便と汗、それに、人間の垢の匂い、それらが一緒になった匂いを嗅いでいるうちに、

彼はまた無性に腹が立ってきた。
手錠は掛けられたままだった。
間もなく起床の声が掛かり、朝の点呼がはじまる。新品の手錠を掛けられたとき、
「他のやつさ掛げるだらともかぐ、型も同じ、掛げる奴も同じ、おめだぢ、頭の悪いのばかり揃ってるでねなア」
と彼は毒づいた。そのときの怒りがまた目が覚めると甦ってきた。
“いつだって逃げてやる”
事実、収容された刑務所で脱獄を決意した時、彼はすべて完璧にやってのけた。
ちょろい脱獄もいれたらここに来るまでにすでに六回も逃走に成功していた。
それに……どこの刑務所の囚人たちだって、白岩 由吉の名を知らぬものはないと彼は思った。戦争中 のことで、いまは、報道管制がしかれており、新聞 記事にはならなかったが、この閉鎖社会のなかでは、白岩由吉は一人の英雄であるはずだった“もっと、派手に振舞って、仲間たちにおらの存在を知らしめてやらねばな”白岩由吉は頭のいい男であった。
だから、二度も手錠を引き千切ったらどういう処置を受けるかわかっていた。
逃げるなら、素知らぬ顔で施錠させられたまま、じっと時機を待ち、そのときに破錠したほうが賢明な策のはずだった。
だが、彼は持ち前の反抗心の故に、あえて二度までも手錠を壊すことを考えた。ここに収容されている同囚の者たちも驚ろかせてや

りたかったが、権力の衣を着て肩を怒らせている看守どもの度肝も抜いてやりたかった。
横っ面を素手で殴りつける快感だった。
それで、もっこりとせんべい布団の上に起き上り、正座すると、また、きのうと同じ仕種で、腕先に力 を撓（ため）た。「うーむっ」下っ腹を絞り込み、一点に力を注ぐ。
「かきっ！」
新品の手錠は噛みがいいのか、一度では外れなかった。二度目、深呼吸をしてから、手首を左右に一杯に開いた。強い右手首で、下方にと力を集める。
「かきん！」
鉄輪のぎざぎざ部分が、捻じ曲げられ、用をなさなくなっていた。引っ張られた左手首の手錠だけが外れた。さすがに新品だけあって両手錠までは同時に外れなかった。間もなく、起床の声が掛かった。
手錠を掛けられたままで朝の房内掃除ができるわけもない。
平気で彼は布団のなかにいた。
規則だと一度、開錠し、正座させて称呼番号を言わせるのに、視察孔から保安課長が直々に顔をのぞかせただけで、舎房の開錠はされなかった。
十数分後、朝食が配られた。
雑役夫の引く手押し車の音が、二十四号舎房の前で止まった。そのとき、白岩は、食事差し入れ口に左手をさし出し、汁碗（じゆうわん）をさっと中に引き入れた。
一瞬、雑役夫の手が止まった。

その手には手錠がされていなかったからだ。白岩は、わざとらしく、右手首にぶら下っている壊れた手錠を、食事口の前でちゃらちゃらとさせてみせた。

またたく間に、第二の手錠破壊事件は第四舎房内に伝わった。

雑役夫が驚ろきをそのまま、配膳作業中に仲間たちに伝えたのだった。

自由になった手で、彼は、麦飯と、味噌汁、タクワン二切れの朝食をきれいに平げた。

雑役夫には出所間近い者か、服役態度の優秀な者が当てられる。彼らは、同じ仲間なのだから白岩の 破錠の事実を看守に報告したりはしない。ただ“白岩由吉という男は空怖ろしい男だ”という噂だけが、同囚の間に伝播（でんぱ）した。

また、白岩は挑戦的な態度に出た。中央見張所に聞えるように大声をあげた。

「おーい！おもちゃの手錠がな、ちゃらちゃらしてうるさくてしかだねえんだ。壊したはで、誰が取りに来い」

この日の当番は、小塚看守だった。てごわしとみたか三人の看守を引きつれて、素っ飛んできた。

「この野郎！」

と小塚看守は我鳴ったが、きのうの勢いはもう失なっていた。ほんとうに度肝を抜かれていた。信じられなかった。

四舎房の通路は薄暗い。凝然と顔を並べた看守たちの眼だけが、白岩にはこのとき見えていた。

保安特別会議が所長室で開かれた。
通常の戒具では役をなさぬことが確認された以上、他の方法を考えねばならなかった。川合所長は規律の厳格なことでは、網走刑務所はじまって以来と言われるほどの人物であった。
戦時中で、刑務所自体が人手不足であったことと、軍国時代の風潮もあって、刑務官の服務規律についても、すべて規則第一主義でとおした。鬼の所長ということになるが、迎えた白岩由吉もまた稀代の脱獄鬼であった。
二度までも破錠した白岩由吉には後手錠が噛まされた。
後手錠の状態で三日が経過した。
三日目のことである。
後手錠なのに、また昼食時、彼はきれいさっぱり手錠を外し、自由になった手で、二個の握りめしをうまそうに食った。
引き千切ったのではなかった。
どこから手に入れたのか、三センチほどの長さの針金一本で、後手のまま、錠前の共腹部分をつき動かせた。彼は、かんたんに、手錠を外してしまったのだった。
犯罪歴を繰ると、白岩由吉は土蔵破りなど朝めし前、針金一本あれば、どんな錠前でもあけてしまう技量の持主だった
緊急の特別保安会議がまた開かれた。川合所長以下、幹部職員が対策を練った。人手不

足の折柄、白岩由吉だけを特別扱いし、多人数を割くわけにはいかなかった。
川合所長は、カニ錠の使用を口にした。川合所長の決意に職員は押されるかたちとなった。あまりに、苛酷な戒具なので悪評が高く、これまでほとんど使われたことのない問題の戒具（かいぐ）だった。
この網走刑務所にも元は三個あったのだが、明治から大正にかけて使われただけで、昭和の時代に入ってからは便用された例はなかった。今は一個だけ残されていたが、半ば錆びついていた。
使用可能にするために手入れした。
カニ錠は名のとおりの形状をしている。円形の鉄製戒具からは、手足を拘束するための四本の連鎖状のクサリが出ている。
それぞれ両端が円形の鉄具に喰い込んでおり、鉄具の中央部にある凸部の小さな鍵穴に鍵を差し込めば、チェーン部分が内に巻き込まれて締まる仕掛けになっていた。
柔剣道の達人ばかりが選ばれた。日本刀を手にした看守には反抗すれば一刀の元に斬り捨ててもいいという許可さえ出されていた。
四帖半のスペースの独房内に、五人の看守が入り、あとは通路で待ち構えた。
「おら一人を、大層なことだな。その日本刀でおらごとたたっ切るだが」
白岩は看守たちに鋭い一瞥（いちべつ）をくれた。力づくで彼を屈服させようとしている連中の一人一人に唾を吐きかけてやりたくなった。が、持ち込まれたカニ錠を見て、さ

すがの彼も顔色を失なった。
血の気が失せて行くのが自分でもわかった。この戒具の怖ろしさは刑務所を渡り歩いた人間なら誰でも噂話で聞き知っている。
地獄の責苦として悪名高い戒具であった。
「手間かけるんじゃない。な、これでお前も懲りるだろう」
先頭に立った小塚看守が言った。胸を張る。あとに控えている看守たちは全員が及び腰になっていた。
抜身の日本刀が、白岩の眼の先につきつけられた。小塚看守が口元に薄い笑いを浮かべた。精一杯虚勢を張っているようにも見える。両者の間で火花が散った。
眼と眼が合った。
「大□をきくのもいまのうちだ。カニどころか、お前は海老みたいに背を曲げてうんうんと苦しむことになるんだからなっ」
重そうな鉄塊が足元に投げ出された。蟹というよりは四つの脚を持った鉄製の生き物に見えた。チェーン部の脚だけは、いぼいぼのある蛸（たこ）の脚を思わせた。
「そしたもの、三日もあれば、ばらばらにしてみせらあね。へっ」
彼は大言壮語したが、上体を前に折られ、立膝させられて、四つのチェーンの穴に、手足を入れられたとき、絶望的な思いに捉われた。二本の手を前に突き出すと白然に頭が下り、立膝させられた膝の上に顎がのった。
いかにも頭を下げ、詫びている図だった。きりきりとチェーンが巻かれ、平べったい、

丸い鉄具に、彼の手足は完全に繋ぎ止められた。
「何時間持つかだな。音を上げなかった奴は一人も いない。どうなるかはこれから自分で味わうんだな」
「へへ、おめだぢど智恵くらべだ。それに、おらの体は不死身だということを忘れるな」
まだ、このときは、彼は小塚看守を睨めつけるだけの元気があった。
が、手足を固定されて二時間も経つと、先ず腰に痺れがきた。背を前に折った海老の姿そのものだった。腰を動かすことはできたが、手と足は大地の木の根っこに繋がれているようなものだった。
次に背中に鈍痛がきた。
夕食の時間になった。食器だけが足元におかれた。どうやって食べるのか。後手錠されていたときは足で食膳を取りよせ、食器の中に顔を突っ込んで食べた。
が、カニ手錠は完全に手足の自由を奪っている上に、顔は立膝した膝の上にあるのだから、床の上の食器にとどくはずはなかった。
拘禁されている者にとってたった一つの楽しみは食事の時間である。
彼は食べることもならず、ただ木の盆の上にのせられた麦めしと身欠きにしんとひじきの煮付け、一汁の味噌汁を睨み据えていた。
「くそお！」
ほんとうに、心底から怒りが込み上げてきた。足が自由なら、蹴り飛ばしてやるものをと思った。

床の上にへばりついたようになっているカニ錠を腕の力で持上げようとした。腕が数センチしか上に上らない。足の力で少し引き擦ることができたが、それは自分自身の拘禁されている姿勢を余計に悪くすることでしかなかった。
「どうせ、食っても、もどしちまう。苦しい思いをするから、見るだけにしておいたほうがいいぞ」
小塚看守は首垂（うなだ）れたままの小男にさっき、勝ち誇ったようなことを言った。
三十分もすると、手つかずのままの食事が彼の足先から持ち去られた。
たった一つの彼の抵抗は、小塚看守が入ってきた時に、戒具を嵌められたままの状態で小便を垂れ流すことであった。
腰を少しだけ持ち上げ、獄衣のまま彼は放尿した。小便は畳に染み、食膳の木盆のあたりまで流れた。
それで小塚看守は、彼の小便の匂いのついた木盆を手にすることになった。
「今度はこの中に大便でもする気か、おい」
腹いせに小憎らしいことを小塚看守は言った。自分の体重が尻骨にかかるので、鬱血して、その部分が痛くなった。
五時間も経つと、背中に一本、針金が入れられたようになった。
その針金は背骨にそって突き刺されていて、体を動かすたびに、激痛が走った。
曲げられ、圧迫された腹部では腸が捻れはじめていた。やはり鬱血しているのか、時折

り、きりきりと切り込むような痛さに襲われた。

自由になるのは首回りだけだった。それも肩口から上腕部にかけて痺れがきている。

この苦痛からのがれるために、彼は口の中で呪文 を唱えはじめた。「死ぬのはかんたんや。命がなくなればええ。そやけど生きるのはこりゃなんぎなこと や。そやからわしは精一杯生きたろと思うてるのや」

若い時に乗った蟹工船で羅本という関西生れの男と知り合った。

もう四十年配の男だった。その大阪生れの男と、もう彼は同じ年回りになっていた。

自分の人生の中で〝もう死んでやろうか〟と思ったことは何度かあった。

そのたびに、「死ぬのはかんたんや」という羅本のことばを思い出した。

いまだって、舌を噛み切れば死ねるのだと彼は考えた。が、このまま死んだところで厄介者が一人、この世から消えただけのことで、彼を拘禁している者たちに何の汚点が残るでもなかった。〝絶対にこいつらに復讐してやる〟一晩中、うんうんと呻ったまま、彼は闇に向って頭を下げていた。口から苦しさのあまり泡をふいた。蟹のように泡をふくからカニ錠の名もついていたのだった。

〝眠るしかない。眠ればその間体が楽になる〟と自 分に言い聞かせたが、苦痛が睡魔を追いやっていた。眠ることもならず、彼は一晩中闇を凝視していた。

網走刑務所所長、川合喜市は、一つの失敗を犯したことに気付いた。

噂をおそれたのだ。

翌朝、一旦、カニ錠を外し、白岩由吉には食事をとらせた。

彼は食事を拒否する気構えでいたが、体力のことを考えて食事を口にした。これは彼の徹底抗戦の意志のあらわれであった。逃げるには体力がいる。そのためには食事はちゃんと、とるべきだと考えたのであった。

白岩由吉にカニ錠を使用したことは、もう、刑務所内では誰知らぬこととなった。同じ独居房の外れに、共産党の幹部の男が拘禁されていた。

思想犯であることで、この男は特別扱いされていた。所長室に時折り、出入りし、天下国家を論じることで、所長は“共産主義とはなにか”をこの男から学んでいたのである。刑務所内で煽動的なことをやられても困る懐柔策の一つとして所長室で茶菓を与えたりもしていた。

この男は弁護士の資格も持っていたので、刑務所内なのに“先生”と呼ばれていた。この男の耳に、カニ錠を使ったというニュースが入った。

“先生”は早速、所長に面会を申し入れ、人権問題だからカニ錠の使用を即刻やめるように申し入れた。

大学出の弁護士、しかも共産党の大物、そ

れで川合所長は異例のことだったが、この時、カニ錠の使用を止めた。何日間も用いられる戒具でもない。やはり刑務所長も違法性は認めていたことになる。この思想犯の男は所内の囚人たちには人気があった。

貧乏人のために手を借そうとし捕えられた偉い人として囚人仲間では慕っていた。

その分、影響力も強かった。

川合所長は、あっさり、“先生”の要求をのんだ。カニ錠という、忌わしい戒具の存在をみんなが知っていることに問題があった。

川合所長自身、カニ錠が用いられた事例は一つしか知悉（ちしつ）していない。

刑務所内での刃傷沙汰で相手に傷を負わせた無期懲役囚の例を知るだけだった。

三つまでも手錠を外したことで、カニ錠は応急的に使用したと、所長は“先生”に苦しい弁明をした。カニ錠の使用は、結局三日間だけとなった。それ以上の使用は無理だった。また、後手錠が施された。

刑務所側は、特別設計の戒具を、刑務所内の小さな鍛冶工場で作らせていた。

絶対に破錠不可能な、それは頑丈な戒具であった。これも違法だったが、この方法以外に脱獄魔の男を拘禁しておく手盾（てだて）はないと考えた。

前回、後手錠を外すのに用いたのは、どこから手に入れたのか、三センチほどの長さの針金であった。白岩自身は、野沢看守に「後筒でもち込んだものですよ」とうそぶいてみせた。

後筒というのは、肛門内にものを隠すことを

いう。油紙などに包んで、奥に入れておくので、入所時の肛門検索でも発見されないことが多い。掌の中にあった針金を彼はこのときはあっさり野沢看守に渡した。
後手錠した日から、食事の配膳作業は雑役夫にまかせず、看守自身が行なった。雑役夫から、針金が差し入れられることだってあるからである。
「ご苦労さんなことだべな」
そのたびに、白岩は皮肉たっぷりにことばを返した。
このところ、彼はご機嫌だった。
カニ錠を外された理由を、野沢看守が、房内捜検のときに教えてくれた。
刑務所側は、小塚、野沢両看守を白岩の専任担当としたが、ちゃんとそれぞれの役割りを与えていた。
鬼塚は名のとおり硬面一辺倒（こわおもていっぺん とう）野沢は人のいい性格を生かして、親切さを売りものにする両面の管理体制である。野沢は食事の時はつきっきりで、後手錠を外してくれた。房内で一対一の関係になるが、所長からはその機会に、白岩のこころをなんとか解きほぐせと指示を受けていた。
「おら、その先生さ一度お礼ごと言いたいもんだなァ」
「そりゃもうだめだ。持病の腎臓が悪くて、きのう内地の病院に送られたよ」
野沢看守が白岩に言った。
ほんとうはこんな会話は禁止されている。
食事が終ると、白岩は素直に手を後に回し

た。食事の時と用を足す時、そのたびに野沢看守がやってきた。非番の時は、小塚看守がいたが、弱いところを見せないために、他の若手の看守が野沢の代りをつとめた。

網走刑務所に入所して十三日目の朝のことであった。四舎房の中央見張所のあたりが急に騒がしくなった。放射状の五つの舎房の要の部分に位置するその場所は、二十四号舎房の窓からは窺い知ることはできなかった。

五、六人の看守の足音がし、二十四号舎房前で止まった。保安課長の姿もあった。

小塚看守が真っ先に、勇んだ足音を立て、舎房内に足を踏み入れた。

白岩に一発噛ませた。

「おい、お前の態度の悪さも、もうこれまでだな。お前は特別のお客様だ。今日からは、ぐうの音も出なくなるぞ」

四人がかりで、鉄製の戒具が房内に持ち込まれた。二十四号舎房の狭い舎房内に八名の看守たちが入り込む。

みんな壁に貼りついた。

保安課長が作業の開始を命じた。

白岩の足元におかれたものは鉄具の足枷（あしかせ）であった。一つではなかった。

手枷用の特製の手錠も用意されていた。

「足を出せ。これでお前の足が腐れば、もう逃げることなどできんようになる」

保安課長は後手の姿勢のまま、胸を張り、小男を見下した。

「おまえら、今がらなにするんだ。おらは死刑囚でねえ。殺すんだら、おらの首を絞首台

でつるせや」
悪態を吐いたが、大口が叩けたのはそこまでだった。
後手錠は嵌められたままだった。
両足を押さえつけられ、金床を思わせるどっしりとした造りの長方形の足枷を両足首に噛まされた。部厚い半円形の鉄輪が二つ、合わさった。足の自 由が奪われた。
鍛冶場でヤキを入れ、熱処理加工さ れた頑丈な造りの足枷だった。
厚さも五センチはあ る。鉄具の両端がボルトとナットで締め付けられた。着守の一人が六角頭のスパナでぎゅっとナットの頭 を締めつけた。鋼の一部は紫色の光沢をもっていた。ヤキが入れられたのは一目瞭然だった。
曲がりもしなければ、ヤスリもかからない造りである。
二つの鉄輪の接合部分の中央部が、軟鉄でかしめられた。合わせ目に、直径一・五センチほどの穴の部分が造られていた。
その穴に、軟鉄のボルトが嵌め込まれ、鶴首に似たハンマーが、その頭を打った。錠前では鍵を開けられてしまうから、つなぎの部分をかしめてしまおうという作戦だった。
そのボルトの頭が潰される。下辺はボルトの六角形の頭で止められていた。
上だけは潰し、軟鉄を押し広げれば、かっちりと半円形の鉄輪は、足首に掛かり、いくらじたばたしても外れないようになるのであった。両端のボルトと中央部のかしめによる固定、都合三ヵ所の止めの部分を持った頑丈

な鉄具であった。
この作業のために、二十分ほどもかかった。足首に喰い込んでいる鉄輪は抜けないように、ぎりぎりの大きさにしてあった。嵌められただけで、足首が痛んだ。
ハンマーの頭が、ボルトの頭を押し潰すたびに、骨に直接痛さが伝わった。八人の看守たちの眼が、一人の男に注がれていた。野沢看守の姿は見えない。彼は今日から特命を帯びて、二十四号舎房の隣りの二十三号舎房で看視のために寝泊りすることになっていた。
足枷が終ったら、今度は手枷の番だった。それも 後手のまま、特別製の鉄具を同じ手順で装着された。
「畜生！手も足も使えねだば、めしはどうやって食べるんだ。クソたれるどぎはどうするんだべ。おい、おめだぢ、これだば犬畜生よりひどい仕打ちだべ、よお」
声を掛けたが、誰れも答えなかった。
「おい！おらにめしも食わさねえ気だな」
「口がありゃ、めしは食えるぞ。食えねえならどう せ、穀潰しだ、見るだけにしてろ！それがお国のためだろが」
小塚は悪鬼の形相をしてみせた。後手の手枷も相当の重さがあった。手錠とは言い難い。鉄具の部厚さは通常の手錠の三倍はあった。鍛冶場から鉄の打台が持ち込まれていた。その上に後手部分がのせられ、同じように、接合部が、ボルトでかしめられた。手首のくるぶしが、がんがんと直接ハンマーで打たれた

。激痛をともなった。
はじめてのことで、小一時間はたっぷりかかった。白岩由吉はもう口を閉ざしていた。
（絶対に逃げてやる！おめだぢおらに逃げろと火をつけてるようなものだべ。おらを怒らせたらどういうことになるか、おめえら犬共にはなんもわがってねな）
この仕打ちに、確固たる脱獄の決意が湧いて出た。絶対にこれでは逃げられない。まったくそのとおりであった。だったら逃げてやる。かえって彼の反抗心に火が付いた。
入所したその日に、四舎房の仲間に、彼は脱獄宣言をやってのけた。
“これは男の約束だ”手伽に痛さが加わるたびに彼は脱獄への思いに胸を熱くしていた。
が、この日、作業が終り、看守たちが、獄舎を去ったとき、彼は、カニ錠を施されたときより、暗い思いになった。
足伽の金具は重くて両足では上らなかった。地に足が吸いついてしまったように。
急に、彼は気が狂いそうになった。わけもわからずわめきたくなった。手足が自由なら、木製扉を叩き割ってしまうところだった。
が、ぎりぎりと歯ぎしりしたまま、しばらくの間、彼は耐えた。いま、狂態を見せるとおれの負けだと思った。
ふと、長い間忘れていたふるさとの唄を思い出した。彼は手枷、足枷が嵌められているのに毅然と胸を張った。
犬畜生のような扱いを受けていたがほんとうの犬畜生にはなりたくなかった。

二十四号舎房での騒ぎは、もう仲間のみんなにも知れ渡っているかも知れない。鍛冶場で鉄具を作らされた連中だって同じ囚人仲間だった。四舎房だけの話ではなく、特製戒具の話は、網走刑務所の二千数百人の収容者たちの耳にすでに入っているはずだった。

彼は下腹に力を込めた。深く息を吸った。いい声を出すためには先ず、姿勢がよくなければならない。

それで、背中に回った手先の鉄具の重さを支えかね ているのに、彼は背筋をぴんと伸ばした。

♪アーンアアン
いまの世の中
世はさかさまだ
喜瀬金木の間の
川コ石コ流れで
木の葉コ沈む

津軽よされ節の一節が、しーんと静まり返った四舎房の通路の澱（よど）んだ空気を揺るがした。美声であった。

節回しも充分の哀調を含んでいた。津軽よされ節はなかなか素人では歌いこなせない。声量の豊かさと、高音と低音を巧みに使い分ける技が求められる。

♪アーンアアンアー…
おらの親父（とっちゃ）やは
女郎買いが好きだ
酒コばかり好きだ

それも冗談だ
おらと寝るのが一番に好きだ
これだばほんとうだ♪
アーンアアンアー
となりの娘（あね）こよ
おめえだが好きだ
晩にいぐから
スンバリはずせ
おらがいっても声だば出すな
こいしこいしと泣かせてやるべ

廊下の両側に並んだ八十の独居房に、ちょっとユーモラスなよされ節が届けられた。
もちろん、中央見張所から看守が一人とんできた。制止させるために二十四号舎房の前に立ち、鉄格子の視察窓から中を見たら、背をぴんと立てた白岩由吉が瞼を閉じ、顔を真正面に向けて咽喉を震わせていた。
看守は制止するのをためらった。
二十三号舎房には野沢看守が囚人顔をして張り付いていた。見張所から飛んで来た若い看守を押し止どめた。野沢看守は絶望の淵に立たされた白岩由吉の心情を読みとろうとした。哀調を含んだ声に胸を打たれていた。
若い看守の眼が舎房内の白岩を捉えた。
白岩の閉じた瞼からすーと一筋の泪がこぼれ落ちた。哀調の節はこころからのものだった。規則違反だったが、よされ節にはこころを打つものがあった。
澱んだ薄暗がりの空気が津軽の野づらを渡る爽やかな風に変えられていた。

白岩の瞼の裡にも、青田をすぎる初夏の風や、穫り入れどきの重い稲穂を揺すらせる秋風の、ふるさとの風情がふと見え隠れした。

5

この、“津軽よされ節”の一件はすぐに上司に報告されたが、罰則を受けることはなかった。戒具を舎房内で装着することが違反である上に、特別戒具だった。少し大目に見た。

いかに脱獄常習犯と言えども、明らかに人権を無視していたからである。

川合所長は五十五歳停年の刑務官生活をあと二年で了えることになっていた。

有終の美をもって退官したい考えだったが、厄介な脱獄常習犯を預かることになった。

それで、特に、白岩由吉に対しては最大の関心を示した。逃げられては困るのだった。汚点を残したくはなかった。

白岩由吉は、特別戒具を装着された翌日から、完黙をとおした。

憤（いきどう）ろしい思いが沸々と湧き起っていたが、なす術はなかった。

泣いてもわめいても鉄具がどうなるものでもなかった。昨夜は妙な恰好で寝た。

あお向けになることも、横になることもできない。鉄具の重さに肩先と手首に痺れがきた。

壁に背をもたせて寝たが、夜中に何度も眼が覚めた。同じ姿勢を続けているのが辛くて、体を横たえた。

足枷は重いから固定されたままだった。

それで、膝を内側に折ったが、足首だけは畳の面に平行のままになるので、ふくらはぎにすぐに痙攣がきた。手枷は後手になるのでこれまた背を畳の面に押し付けることはできなかった。

横臥の姿勢だったが、手枷の嵌まった手首だけは宙に浮かす恰好になった一

足を投げ出し、壁際に身を寄せて手伽を便器の上においているのが一番楽な姿勢だった。それでも背筋には鈍痛があり、足先は痺れた。

食事は入口の板の間まで、にじり寄り、犬のように這いつくばって、がつがつと食べるしか方法はなかった。

半分も口にしないうちに食事は持ち去られた。食器の中に顔を突っ込み、汁碗は口で支え持ってのんだ。麦飯がこぼれ落ち、味噌汁は獄衣に染みた。

二、三日、顔を見せなかった野沢看守が舎房内に入ってきた。

「二見ヶ丘の分監に行ってたものでな。白岩、辛いだろうけど我慢しろ。お前が反抗的な態度さえ見せなければ、いつまでもこのままにしておくわけはないさ」

白岩はただ野沢を睨み据えていた。

「おい、そう恐い顔をするな。これでもたいへんな ことになったと思ってこころの中ではお前に同情し てるんだよ。手足がこれじや不自由だろ、なにかあ ればわたしに言ってくれ。できるだけのことはする」

それでも、白岩は口をへの字に結び、強い

視線を野沢から外らさなかった。無言の抗議をしているつもりだった。
「わかった。喋りたくないなら喋らなくともいい。だがな、お前に一つだけ伝えておきたいことがあってな。この舎房の七十八号房にいる老人がお前によろしくと言っていた。名前は吉峰だ。お前の津軽よされ節に聞き惚れてな、おいおいと声出してあの爺ちゃは泣いたんだそうな」
吉峯勇蔵？忘れもしない男の名であった。
「あの爺（じぃ）ちゃがここに？」
完黙をとおすつもりだったが、彼は思わず口を開いてしまった。
「お前とはシャバの仲間か。吉峯は老人性結核でな、もう病院へ移しても手遅れだからここにおいている。それでな、白岩とはショッペイ河（津軽海峡）を渡ってきた仲だから、あの歌こ聞いて泪が流れたんだと。どうせここは出れねえけれども、死んだらな、鏡橋のたもとから骨を網走川に投げてくれと、看守のみんなに頼んでいるのよな。海につながってるから、いつかは生れ故郷の津軽に自分の骨が流れ着くと思っているんだ」
白岩は泪がこぼれそうになったが、じっと、こらえた。鏡橋は網走刑務所の入口にあり、刑務所に沿って網走川が流れていた。
受刑者が最初に渡るのがこの鏡橋である。
“よし、爺っちゃ、おらが爺っちゃの骨をもって逃げてやる、津軽のな。岩木山がよく見える爺っちゃの村に、おらが連れてけえってやる”

声には出さなかった。
この爺っちゃへの思いを、この時、彼は胸深く呑み込んだ。
吉峰勇蔵は、言わば、命の恩人であった。もう、十二、三年前になる。
旭川の人足手配屋、大屋組から送られ、中士別原野の山崩し工場現場に出た時のことであった。不景気風の吹いている頃で、半タコ部屋と呼ばれており、それだけ、仕事はきつく、命は保障されていない。
その現場にいた時、一緒に組んでいたの仲間の一人が事故で死んだ。彼はその時、トロッコ事故の連帯責任を問われて監督にヤキを入れられ、丘の上の風の吹き抜ける場所で、オンコの大樹に縛りつけられた。
三月に入ったばかりの日のことであったが、もう一メートルを越す積雪で一面は銀世界であった。
見せしめのために木に縛りつけられた彼はもう死を覚悟していた。一人ぐらい死んだところで物の数ではないのだった。
吹雪いてくればたちまちのうちに凍死だった。酷寒の中で一晩耐えた。
まだ二十六歳、若かったからもった。
だが二日目は自信がなかった。
雲行きも怪しくなっていた。
現場に人夫たちが出発する前に、世話役をやって いた吉峯が組長に言われて様子を見にきた。この時、そっとブリキ板で作った手製の鋸で吉峯が縄を切って逃がしてくれた。
吉峯とは、同じ東津軽の出なので、よくふ

るさとの話などを聞かされた仲なのであった。この時の吉峯の手助けで、凍死のおそれもあったところを彼は危うく命を救われたのである。

野沢看守とはこの時の会話が機縁となって彼は口をきくようになった。

少しだけ彼は心を開いてみせた。

6

網走刑務所側の監視体制は万全の策をとった。足枷・手枷はそのままで、一週間に一度の入浴時には、かしめ部分を新しいのに取り替えた。かしめを外し、また新しいのを打込むのに二時間余りもかかった。

白岩にとっては入浴時間が唯一の、手足が自由になる時間であった。

普通、刑務所内での入浴は一人三分程度、それも順番に、慌しくすまさなければならなかったのだが、白岩は悠々と一人で湯漕につかった。特別扱いだった。

そんな時は、得意のよされ節も出た。

が、新しくかしめ部分が打込まれるたびに、彼は絶望的な思いになり、憤怒（ふんぬ）が肚の底から沸いて出た。

彼は決意した。

脱獄の準備にとりかかるべきだと考えた。

四月の末に送られて来て、すでに五ヵ月、暦の上ではもう九月になっていた。

玉蜀黍（とうもろこし）が黄色くなると脱獄囚が出ると地元の人々が口の端にのせる

季節が来ていた。何とか、逃げ出したい。
だが、絶好の季節なのに、あまりにも手枷
・足枷は完全無欠の頑丈さを持っていた。
五ヵ月の期間は余りにも苛酷な毎日であった。食器の中に顔を突っ込み食事をとる。
あたりに食い散らした飯粒や菜などがこびりついていた。
夏の季節だから蝿がたかった。
野沢看守の考えで、赤い獄衣の尻の部分の糸がほどかれた。糞便は畳の上に垂れ流す。部屋の隅に桶の便器があったが、その上に腰掛けるのは無理だった。
足腰の力だけで、腰を持上げなければならず、それには後手の手伽が邪魔になった。
糞便の山の上にも、銀蝿がたかった。
「おい、臭くてかなわんな。どうだ！裏山の木にでも繋いでやろうか。その代り、オジロワシか熊にでも襲われるかも知れんがな」
このところ、彼がおとなしくなったので、小塚看守が、ある日、珍らしく冗談口をきいた。
「担当さん、せめて手枷だけでもとってくれるよう頼んでくれませんが」
白岩は考えるところがあって、小塚看守に口をきいた。
「だめだ。ならん、上からの命令だからな、六回も逃げた分をな、みんなここで思い知らせてやれということよ。お前は人間じゃないから人間扱いしない、当り前だろうが。それに秋は赤い服着た奴が逃げる 頃だからな」
看守でさえ、二十四号舎房には寄りつかな

くなっている。臭気は、外の通路にまで匂っていた。風呂に入れられるまでの一週間、食い散らした物や、糞便があたりかまわず房舎の中には落ちていた。

八名もの看守がやって来て、手枷・足枷の四ヵ所の締めつけボルトと、かしめ部分を外す。白岩は手足が自由になった時に、まとめて一週間分の掃除をやらされた。

だが、畳に染みついた汚物の臭いが消えるわけではなかった。

秋も半ばの頃、台風がやってきた。オホーツク海の潮騒は、夜毎に、ごおーと鳴る遠雷のような波の音を届けていたが、この日の夜の海の怒りの声は凄まじかった。

風速二十メートルは越えていた。

看守たちも非常警戒のために狩り出されていた。怒り狂った波がやって来て、いっそのことこの刑務所の舎房をひとのみにすればいいのにと彼は思った。

明治以来の木造建築物だった。

どこかに弱い部分があるはずだった。

が、海とこの刑務所との距離はかなりある。大津波がやって来たところで、四足獣の構えを持つこの刑務所までは到底届きそうもなかった。

だが、逃げられはしないのに、逃げるならいまだ と彼は自分に言い聞かせていた。手足さえ自由なら、どんなことをしてでもこの閉ざされた獄舎から逃げ てやる―一晩中、彼は、足枷のかしめの部分に眼を据えていた。

このかしめの部分さえ外せば、足は自由にな

るのであった。一つだけ彼に有利な材料があった。

一週間に一度のかしめ作業は、気付かぬほどだったが、いちばん初めのときにくらべれば、雑になっていた。

ていねいに、時間をかけて潰された軟鉄の頭は、馴れのせいか、作業時間が短くなり、止めの部分もかっちりとは喰い込まないことがあった。もっともその週によってちがう。

小塚看守がハンマーを手にした時は、必要以上に止め金の部分は押し広げられた。

荒れ狂う風と波の音を聞いているうちに、自分自身が、怒濤逆巻く、夜の海岸線を突っ走っているような気になった。

“おらはどした波さも呑まれねど。ベーリング海の大時化（しけ）の時もそうだった。

川崎船で仲間が波にのまれた時だっておらは生き残った”不死身であることに自分の心を奮い立たせた。

川崎船というのは母船の蟹工船に配置されている十トン程度の小舟のことをいう。漁場に出て網を引く第一線の動力船のことである。

“おらはこれまで何回死んだがわがらねえ”

彼は、みしみしと鳴る木造建築の獄舎の天井を見やった。突風でも舞って、トタン屋根がめくりとられればいいものをと考えた。

が、次には、天井の構造に眼を据えていた。獄舎の天井は高い。二階部分がないだけ、高い構造になっていた。

もちろん、よじ登れるような造りにはなっていない。木製扉の上の鉄格子窓までは高い

踏台でもない限り、絶対にとりつけない。
まして狭い三センチ間隔の鉄格子が十本もかっきりと嵌め込まれている。
天井には明りとりの窓はなかった。
その代り、通路の天井には高い位置に部厚いガラスが入っている。
この刑務所の弱点はどこにあるのか。
まだ、手枷・足枷の状態で身動きならぬのに、彼は、二十四号舎房を破獄したあとのことを考えていた。
ここから出たあとはどうやって逃げるか？
それから、手枷部分を無理に動かし、鉄具の触れている手首に彼は傷をつけるための動作を繰り返した。
これも脱獄を図るための一手段だった。
一週間も経つと、こすれた部分が赤く腫れ上った。かしめ部分を入浴のためにとる時、彼は野沢看守に もう一度申し出た。
「後手だがらこすれてこうなるべ。外してけろってばせねたて、せめで前にしてけれ。担当さん、頼 んでみてけねべが。おら、辛くでなんねえ」
野沢看守とは相変らず、隣り同士の付き合いだった。私語は禁じられていたが、機嫌のいい日は勝手に、白岩は、野沢看守に話しかけた。
だが、野沢看守は保安課長に白岩の申し出を伝えたが許可にならなかった。
あいにくと、網走刑務所ではこの日、脱走事件が起きていた。森林伐採作業に出た鹿山という男が、半年がかりの脱走計画を実行に移しまんまと逃走に成功した。

構外の農作業のため、囚人は二人一組で鉄丸のついた鎖につながれるのだが、この鉄丸の鎖を止める腰 の皮バンドに鹿山は眼をつけた。
構外作業に出るたびに、皮バンド着用の時、思い切り腹をふくらませ、止め金の穴に余裕をもたせた。
自房に帰ってからは、腹をふくらませ、引っ込ませる運動に時間をかけた。
秋の穫り入れ時、好機到来だった。
鹿山は余裕のある分だけ腹をへこませてみせ、すっぽりと腰のバンドを胴体から抜いた。あとは素早く、雑木林の奥に駆け込んだ。
時機が悪かった。それで、白岩の後手錠の件は許可にならなかったのだ。
秋台風が一過すると、もう冬の訪れが早々に網走の地にやって来た。
十一月になると、もう根雪が張りついて、網走の街は一面の雪景色となった。
北風がひゅんと寒気を裂いた。
オホーツクの潮風は、本格的な冬の冷気を持込んだ。どどどっと男性的な轟きの音に聞えた海鳴りの音も、波が切られる音に変った。底鳴りの音はするのだが、海面が、鋭く吹き千切られて、雪まじりの波しぶきが海岸線をひとなめにして行くのだった。
裏の雑木林の尖った樹々の梢にも、北風は容赦なく吹きつける。こちらは、囚われている者のこころの裡（うち）を知っているように、ひょうひょうと心細い声で鳴く。
そんなある日、彼は野沢看守から、吉峯老人の死を知らされた。

肺炎を併発し、病院に運ばれる前に、刑務所内の医務室のベッドの上で死んだ。
囚われたままの身であることには変りはなかった。“爺ちゃが死んだのか…”霊安室を出ても吉峯老人の帰る場所はなかった。
裏の北山の無縁墓地に葬むられることになるのだが、いかにも淋しい死だった。
白岩由吉は、吉峯老人の死を悼むために、爺ちゃの好きだった“津軽よされ節”を歌ってやろうと思った。
が、歌い始めた時、万感の想いが胸に迫って、声にならなかった。
後手に手枷を嵌められていたので、投げ出した足には、金床を思わせる頑丈な鉄具が喰い込んでいるので、痺れと痛さに常時悩まされた。あまりにも哀れな姿に、死んだほうがよっぽど楽になるのにと、いつも思った。
“爺ちゃは死んでもうなんも思い煩うことがなくなったんだべ。こんな地獄に身をおいたんだから爺ちゃは極楽さ行くべ”
一人、取り残されたような気になり、彼は哀しくなり泣いた。
が、この時、彼は気を取り直した。
津軽よされ節を歌った時、吉峯老人も彼の歌声を耳にした。
同じ四舎房にいると知った時、彼は“爺ちゃの骨は岩木山の見えるふるさとの村に埋めてやる”と心に誓ったのだった。
爺ちゃが死んでからは、毎日、毎夜、彼は一人で爺ちゃに語りかけた。
「頼む、爺ちゃ、おらさ奇跡ごとけろ。この

ままだとやつぱ、おらは氷みてだに、冷（しゃっ）こぐな ってまる。おら絶対に復讐してやるはでな。逃げで 雪の中で野垂れ死んでもいいんだ。これだきゃ男の意地だね。おらはいじめられだらいじめられた分だ けちゃんと返す。理屈に合わねごとだきゃ許せねど。爺ちゃならおらの気持でわがってくれるべ」

他の刑務所で、網走の冬の怖ろしさはいやというほど聞かされて来た。

規則どおりやっていたら凍死する。

零下三十度の寒さが木造の獄舎を襲うと、手足を出して寝ていたら凍傷になるし、顔を出して寝ていると鼻の頭がやがて、腐って落ちる。

いわゆるポックリ病という奴で、あまりの寒さに心臓麻揮をおこし死んでしまう者もいる。

石炭ストーブが通路に二つおかれるが、暖房とは名ばかりで、囚人のために用意されたものとは到底言いかねた。

古い天井は木造構造だから隙間だらけであった。時には、粉雪でさえ舞い込むことがあった。石炭ストーブが赫々（あかあか）と燃え立っても、居房内の温度は零下八度か九度、居房の位置によっては十度以下にもなる。

少々の寒さには負けないだけの自信はあった。力仕事で鍛えてきた体である。

だが年を越したばかりのある日、例年よりも十日ほども早く、網走海岸にベーリング海から寄せてきた氷が張りついた。

南下しながらオホーツク寒気団に育てられて、網走の海岸線に接した頃は、ただ白一色の大小の氷の群れとなっていた。

あの、オホーツク海の荒れ模様を伝えていた海鳴りの高まりの音がぴたっと止んだ。
ハス葉氷がまだ海面に隙間を見せていたが、やがて海は氷の下に閉じ込められ、巨大な氷塊が誕生するはずだった。
ニッ岩から能取（のとろ）岬にかけてはウニの好漁場であった。
寒ウニ漁の漁船が最後の漁のためにあわただしくハス葉氷の海を分けて行く。
白岩由吉はただ、急に静まり返った海音に気付いただけだったが、もはや、網走刑務所の周囲は二重三重の氷の砦（とりで）が作られていた。自然の力を借りて、網走刑務所は、完全に陸の孤島の状況を生み出していたのである。
「爺ちゃ、おらごと助けでけろ」
彼には、その声が天に届いたように思えた。
ある日、隣房に張りついていた野沢看守が保安課長に呼ばれ、勇躍、四舎房に戻ってきた。
「おい、白岩、喜べ。お前のつとめが認められた。な、真面目につとめりゃ、ちゃんと所長だって許して下さるんだ」
間もなく、四名の看守がやって来て、彼の足枷の鉄具のかしめ部分を、たがねの刃先ではつってくれた。後手枷も外された。
もっとも、まだ不安だと見えて、この特製鉄具は、前手枷の状態で装着された。
理由は四つあった。
一つは、酷寒期に来ているから逃げたとしても、山中で飢え、凍死するしかないこと。
また、足枷のほうが締め付けがきつく、凍傷になって腐る心配があったこと。

いま一つは、入浴のたびに、かしめ部分をニヵ所も外したり、つけたりで看守たちの手間が大変だったこと。

それから、さすがに懲りたのか、白岩の当初の反抗的態度がすっかり影をひそめたことも、その理由の一つとなった。

内心、白岩は「しめた！」と思った。

足枷の戒具にくらべると、手枷のほうが、厚さも、かしめの部分も小さ目に出来ていた。

それに、前手錠になったことで、手の自由が少しはもどった。

だが、手枷の戒具が、なお、頑丈そのものであることには変わりはない。

厚さ二・五センチ、手首に装着されると、すぐに、痺れた。

ほとんど、座ったままか、体が妙なかたちに折って、寝ていている状態だったのに、この日からは、あお向けになり、背を布団に上につけて眠ることができた。

背中の鈍痛も、尾ていこつに掛かっていた体重の負担もなくなって腰骨の痛みもとれた。

「爺っちゃ、ありがとごす。おらの頼みきいでくれたんだな」

彼は、墓地のある北山の方角に向けて頭を下げた。毎日、手枷の戒具の、かしめの頭を見て暮らした。眼力だけで穴を穿とうとでもしているような執着ぶりだった。

二月になると、流氷群は巨大な氷塊になった。流氷が鳴きはじめた。海はもう厚い氷に閉ざされ、静止しているかのようだったが、潮の流れと、風、温度の差に敏感に反応して、様々な

軌みの音を上げるのだった。
白岩由吉には不可視の世界だったが、閉ざされた者だけがわかる、魂の叫び声を聞いた。海が鳴くのか、氷塊の群れが鳴くのか、きいきい、きいっと軌みの音が聞えたりした。
あれは一隻の破船が、沈んで行く音だ。
いや、あの破船こそ、この網走刑務所そのものなのではないか。
“もうすぐだ、絶対にこのオンボロの破船からおらは逃げてやるだぞ”
壊れた木の扉、その扉を叩き壊すのはこの俺だと白岩由吉は、そのとき、しっかりと自分に言い聞かせていた。

（第一章　了）